

【優秀書評賞】 2040年のアパレルの未来「成長なき世界」で創る、持続可能な循環型・再生型ビジネス

名前 寺本知風梨

ファッションは現代の生活において社会的に注目をされ続けている。しかし、アパレル業界において問題となっているのは環境問題だ。これからのアパレル業界はどう変化するのか。本書は5章で構成されており、消費者ではなく企業の目線からこれからのアパレル業界について社会問題と結びつけながら、今後の業界の立ち位置を明確に描いている。特に、ファッションに敏感であり、これからの社会を担う若者や大学生には是非一度手に取って貰いたい一冊だ。

第1章ではコロナ渦、インフレ等により及ぼされたアパレル業界の変化について述べている。これらの社会問題の影響により生活必需品の値上げが続く中、その分衣服の需要性が低くなり支出も低くなる。またコロナ渦により職場中心から個人、家族の価値観重視のライフスタイルへ変わった人が増えた。仕事以外に時間を使えるようになったことからウェルネス関連市場(アウトドア、スポーツ)が拡大し、人々の幸福度は物質的なことではなく心身の健康と強く結びついていることが示された。

第2章では衣服を作ることで地球にどのような影響を与えるのかが述べられている。本書ではアパレル業界において考えられる、温室効果ガス排出による気候変動問題、環境汚染、資源の無駄使い、人権侵害、動物愛護問題の5つの問題について挙げ、特に気候変動が最も深刻なテーマだと述べている。アパレル業界が多くのCO<sub>2</sub>を排出する理由が衣服の大量生産であり、温室効果ガス排出量は全世界の排出量の約8~10%を占める。また、年間生産数は1500億点であり、1人あたり年間約18着の新品衣服の消費を行っている計算となる。また、環境問題に対する欧州企業の取り組みと比較して、日本企業の環境問題に対する取り組みの遅さが指摘されている。

第3章では2040年に向けて予想される8つの事業環境変化について述べている。全体的に環境に配慮した企業の取り組みの変化が予想されており、環境に配慮した企業が業界で生き残ると考えられる。また、AIやサブスクリプションが浸透したことから消費者のニーズに伴う産業変化が予想されている。

第4章ではこれまで述べられてきた環境配慮を行う上で、アパレル業界ではどのような技術革新が必要なのかが述べられている。素材については、生分解性があり、環境負荷の低い生物由来の素材や生体に関する材料からつくられた「バイオマテリアル繊維」が注目を集めている。また、生産効率の向上や循環型の仕組みづくり、生産過程の明確化、素材を無駄なく活用する工夫や地域文化を活かした工夫などが、環境への配慮に繋がる。

第5章では日本のアパレル企業がこれから先どのような変革を必要とするのかについて解決案を提示している。著者は日本の地域の技術や職人を活かすことや、循環性や再生型を重視しており、日本の文化やコンテンツを掛け合わせたライフスタイルの提案を行っている。

本書の優れた点は、アパレルという観点から求められる生活者のライフスタイル・企業のビジネスモデル像を、今業界が抱える問題を明確にし、具体的な数値を示すことにより、現代に何が必要なのかを提言している点だ。3章から5章にかけて、今後必要とされる循環的な生産を行う上で求められることを詳細に説明しており、考えられる技術革新やデジタル化を見据えた内容となっている。また、アパレル業界の環境問題を中心に説明が行われているため論点が明確で、焦点を絞って読むことができた。

しかし、本書は専門用語や抽象的な理論や概念の説明が多く理解しづらい。また、第1章ではコロナ以降のアパレル業界衰退が述べられていたが、現在も激しい流行の移り変わりによる大量生産は続いている。衰退を述べる上で説明が足りず矛盾を感じてしまった。加えて、流行の終着地点に疑問を感じた。環境問題による市場の成長の衰退は予想できるものの、流行が目まぐるしく変わる現代社会においてどのような過程を辿るのが説明されているとよりアパレルの未来が読者に想像しやすいものになるのではないだろうかと感じた。

アパレル業界は今後、環境に配慮したアパレル企業が残る、循環型になると予測される。これはアパレル業界のみならず他の産業にも求められる。本書はアパレル業界に関心のある読者にとっても、環境問題に関心のある読者にとっても参考になるだろう。そして、アパレル業界のみならず、様々な業界にとって、持続可能な循環型・再生型のビジネスの必要性について考えさせられる一冊であろう。